

# 中国で唯一存在する 日本人公墓は 何を語るのか

## 大類善啓

OHRUI Yoshihiro



1945年8月9日、ソ連軍の怒涛のような侵攻と、それに続く日本の敗戦は、旧満州に国策として入り込んだ開拓民たちを、一挙に奈落の底に突き落とした。すでにその時点、開拓団にいたほとんどの青年・壮年男子は、軍に召集されていた。残っていたのは老人と女、そして子供たちだった。人々は争うように安全な地を求めて逃げ惑い、難民、流浪の民と化していった。ソ連と国境を接する、現在の黒竜江省の奥地に入り込んでいた人々は、ひとまず方正を目指した。旧満州にいた日本人たちは、宝清という県と区別するために方正を「ほうまさ」と呼んでいる地だ。方正には関東軍がいる、軍の補給基地もある。100キロも200キロも歩く逃避行の中、時には暴徒の襲撃に遭い、国に殉じて集団自決した開拓団もあり、子供を捨てざるを得ないような地獄のような体験を経て、ようやく方正にたどり着いた。しかし、関東軍は撤退した後だった。

中国東北部の冬は厳しい。人々は零下40度という酷寒にさらされた。餓えと栄養失調、発疹チフスが人々を襲い、方正の地に息絶えた。1946年の春、夥しい数の婦女子の凍りついた遺体がとけ出した。ハルピンから東へ約180キロの地にある方正にはいち早く、方正県人民政府が成立していた。県政府は直ちに遺体の収容に乗り出

し、三日三晩石油をかけて焼いた。その数およそ4500体といわれている。

新中国の大躍進政策失敗による食糧危機は、多くの餓死者を生んだ。1963年の春、荒地を耕して食糧を調達していいという政府の命令に従い、方正の砲台山に入った残留婦人が累々たる白骨の山を見つけた。これこそ、1945年の冬から翌年にかけて無念の思いをいだき死んでいった同胞たちの骨だ。婦人はなんとしても骨を拾い埋葬したいと思った。その願いは、県政府から省政府を経て中央政府へ、最終的には周恩来総理のもとまでいった。

「祖国を見ることなく逝った開拓民たちも日本軍国主義の犠牲者である」。国際主義的な精神に富んでいた周総理ら当時の中国政府指導部は、日本の侵略に対する恨みがまだ衰えていない1963年、日中が国交を回復する9年前に日本人公墓を建立してくれたのだ。

ハルピン市の朽ち果てた外人墓地の中から、一番大きく一番綺麗なイタリア製の花崗岩を探し出し、「方正地区日本人公墓」と碑銘を刻んだ高さ3.3mの石碑は、2日かかりでハルピンから方正県まで運ばれた。まだ貧しい中国だったが、大金を投じて建立したのだ。

周知のように中国政府は、日本に対する賠償金を放棄した。「周総理が一番頭を悩ましたのは、そ

の決意をした後も、中国で最後まで残された多くの残留婦人を援助し支援した金額の賠償だけは譲れず、日本に請求するようとの声官民一同、とりわけ人民の側から強かった」ことだ。今まで誰にも話さないことであるがと前置きして、この秘話を私たちに話してくれたのは周恩来総理と親しかった故・岡崎嘉平太氏である。

1966年から荒れ狂った“文化大革命”の時、紅衛兵たちは、この日本人公墓を破壊しようとした。その時、黒竜江省政府は「これは日本軍の墓ではない。日本の庶民の墓である。彼らに罪はない」と紅衛兵の要求を断固として退けた。

隣接する国同士がナショナリズムを高揚させるほど不毛なことはない。日本人公墓は、忘れがちな国際主義的な精神を呼び覚ます存在といえるだろう。肥沃な土地を中国の農民から奪い、五族協和、王道楽土と称した“満洲国”は、日本の敗戦と同時に瞬時にして崩壊した。侵略された国が侵略者の人々の墓を建立し、墓守りを置き、維持管理を長年しているのだ。2008年1月、北京に駐在する宮本雄二大使は公墓に参拝し、県政府に謝辞を述べた。しかし未だ、日本の最高責任者からは公墓に関する言葉はない。

(方正友好交流会 事務局長)